

## 編集室から

新春明けましておめでとうございます。

旧年中も皆様方には大変お世話になり、誠に有難うございました。本年も何かとお世話になると存じます。どうぞ、引き続きご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

皆様の昨年一年は、如何でしたでしょうか？

新年号表紙の写真は、昨年1月に撮影した鎌倉・鶴岡八幡宮の大銀杏と神楽殿です。写真右の大銀杏は、この直後の大風で残念ながら倒れましたが、その根からは既に多くのひこばえが、出ています。根を失ったはずの幹も隣接地に据えられ、こちらからも芽吹いています。その生命力に、敬意を抱く共に、我々もかくありたいと思います。

前号で120号を数えたこのニュースレターも、また新たな10年を迎えます。従来にまして、ご声援・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

記念すべきこの新春号にご寄稿いただいた本田さんは、熊本県人吉市で食と農と命を考える郷土食レストランを開いておられる傍ら、全国の地域づくり活動のアドバイスに飛び回っておられます。東北の地域づくり活動のアドバイス先で知己を頂いて以来、親しくさせていただいていますが、ガンを克服された後の活動は、バイタリティに溢れ、とても輝いておられます。この度も超ご多忙の中、ご寄稿を戴きました。本欄を借りて御礼申し上げます。今年5月の熊本・人吉での再会を楽しみにしています。

隔月レギュラーのイガさんの影響でiPadを買いました。この情報端末で、FaceBookという新しいコミュニケーションツールも共に、使いこなそうと、また一つ挑戦を始めています。

本年も皆様にとりまして、素晴らしい一年でありますように。

心よりお祈り申し上げます。(は拝)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2011/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2011/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

# 謹賀新年

## 睦月



ご神木・大銀杏の記憶  
昨年睦月、鶴岡八幡宮にて  
by hama

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、ますますご清栄のことと心よりお慶び申し上げます。熊本県人吉にてコミュニティレストランを運営させて頂いております、ひまわり亭代表 本田節と申します。

さて、今年は「第二九回地域づくり団体全国研修交流会熊本大会」が五月十三了十五日、熊本で開催されます。地域づくり団体が一堂に会し情報交換や課題を話し合うのが狙い。熊本大会の見どころなどを御紹介させて頂きます。

大会テーマ、かたらんね！もえる火の国熊本で」の思い。

「かたらんね」には参加しましょう、語りましょうの二つの意味を持たせました。「もえる」には地域づくりに対してと、緑燃えるを掛けています。五月のまぶしいばかりの新緑でお迎えしたいと存じます。

熊本に大会を誘致した狙い。

県内には地域づくり団体（火の国未来づくりネットワーク加盟）が三百十ほどありますが、世代交代などで活動が停滞しているところもあります。一方で、九州新幹線全線開業を控えた熊本は同じベクトルで進んでおり、新しい地域づくりのチャンス。大会をそのきっかけにしたいです。地方は過疎化などマイナスイメージでとらえられがち。でも、実際に足を運んでみると暗さはありません。地方も元気だよ、ということこそを熊本の地からアピールしたいと思

### 濱のつばやき 『種を蒔く』

企画・計画を立案するという仕事柄、物事の本質について考えることが多い。言葉や表現方法に窮すると、文字や語の原義を辞典に探す事も少なくない。それは、部首の意味や、その文字の成り立ちの過程・言い回しの出典について及ぶ事もままある。自らが納得するまで、探られ続ける。

はたと思いが至った瞬間、それまで個別バラバラに見えていた枝葉が、あたかも一本の幹につながっているが如く関係性が集約され、より深い本質が垣間見えてくるようになる。この喜びは何にも代え難い。

企画をする。街や地域の再生計画を立てる。という仕事は、極めて内省的なものなのかも知れない。

「有難うございます」とは「奇跡でございます」の意で、これ感謝の言葉として用いる日本人の感性の素晴らしさ（二〇〇八年八月号本欄）も、このような過程で得られた気づきの一つだった。

先日、ある会合で「現実」という語の意味についてハツとする解説に出逢った。

曰く、「現実とは、実が現れること。」  
実が現れるとは、因が果を結ぶことであり、因果応

います。

### 新たな試み

全体会をやって、分科会、解散というのがこれまでだった。みんなが何らかのヒントを得たいと思っただけに参加しているのに、私自身も消化不良でした。熊本大会での新たな試みとして、県内各地で分科会を先に二日間やって課題などを十分に論議し、熊本市で開く全体会に乗り込む形を取りました。熊本市と十の県地域振興局単位で実施。私の住む人吉球磨は「相良の文化をつなぐ百年レイル 心ぬくもるツーリズム」それぞれの地域の団体が実行委員会をつくり、地域性を持ったテーマで準備を進めています。

### 実行委員会形式にしたのは。

同じエリアで、目的も一緒なのに、それぞれの団体がどのような活動をしているか知りません。受け皿作りを通して、団体が繋がるきっかけにしたい。活動内容を紹介し合うようなブロックごとのイベントも開催しています。気持ちが一つになることで、地域力が高まります。効果は大会後も続いていくと思います。

最後になりましたが、皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。



【プロフィール】（ほんだせつ）三七歳でガン闘病を経験。食・農・命をより深く考え始め、常にチャレンジ精神を持って全力で年間の半分近く全国講演等で走りまわっている。

報と同義である。現代、因果応報はあまり良い意味には用いられない。が本来、結果の善悪に関わらずある事が何かの結果の原因となり、しかもそれが連鎖的に起こっているのが、人生の現実である。

善き果実を現したのであれば、その種（実）を蒔くに限る。

本号にご寄稿を頂いた本田さんのお師匠様は、勿体無いの精神が行き届いている方だと伺った。

「もったい」とは、「そのものの本来の価値」を意味する。何でもかんでも「勿体無い」と称して捨てずに溜め込む人がいる。ただ仕舞っておくだけで、それを活用しないのであれば、価値を活かすことにはならない。つまり、使わずに仕舞い込むだけの行為もまた、「勿体無い」のである。

自分の価値について、本当に理解して活かさきつている人はどれ程いるだろうか。もし、自分の価値を活かすきつていないとしたら…。さらに自分の価値さえ、本当は知らないでいるとしたら…。これほど勿体無いことはないのではないか…。

モノの勿体無さもさることながら、自らの勿体無さについて、もう少し考えてみたいと年初に思う。

11月初旬のことだった。JR四ツ谷駅前にいた僕の携帯が鳴った。姉からの電話だった。

「お母さんが、どうやら認知症になったみたい、医者診断書にそう書かれている・・・」

ショックだった。母親は一人暮らししている。

確かに最近ちょっと物忘れが激しいとは思ってはいた。でも、78歳と言う年相応のことだろうと思っていた。これからどうすればいいのか・・・、と途方に暮れていた。

ふと前を見ると、「ビッグイシュー」を売っているおじさんがいる。「ビッグイシュー」とは、ホームレスの人々に収入の機会を提供する事業として編集された雑誌だ。

俺も大変だけど、この人も大変なのだろう。それで買って読みだした。すると、「認知症に効果？ヤマブシタケから“ヘリセノン”の発見」という記事が目止まった。ヤマブシタケについては、10年ほど前に出会った長野の経営者から、自己免疫を高める効果があるという話を聞いたことがあった。ともかくすぐにこのヤマブシタケのサプリメントを仕入れて、母親に送ることにした。

数日後、朝何気なくNHKのニュースを見ていると、認知症の特集が放映されていた。徘徊老人の独白だった。徘徊するのは、将来に対する不安と、家族に与える迷惑との葛藤から、死に場所を求めて歩いているのだと知った。わが身に直して考えれば、もっともなことだと思った。

姉や弟と電話を通してあれこれ相談する日々が続いた。姉は能登の中島町に嫁いでおり、弟は岐阜に単身赴任。僕は東京に単身赴任。3人の兄弟が顔を合わせることは、ここ数年は年に1回あるかないかで、電話で話すこともあまりなかったのだが、大幅に話す機会が増えた。

兄弟の母親に対する接し方が大きく変わった。これまではちょっとした物忘れに対して、厳しく当たっていたのだが、これを改めた。姉は毎日4～5回電話して、週に2日は金沢の母親を訪ねるようになった。僕も毎日母親に電話するようになり、2週に1度帰省した折には必ず顔を出している。弟も実家に顔を出す機会が増えた。

このコラムを書いているのは12月14日。あれから1カ月半ほど過ぎた。昨夜も姉と電話で話していたのだが、母親の物忘れがずいぶん減って来ている。何が効いているのかは不明だが、良くなってきていることは事実だ。

セレンディピティとは、偶然をとらえて幸運に変える力、思わぬものを発見する力の事をいう。

どうやら僕は、家族愛と言うものを再発見したようだ。

尖閣諸島問題、北方領土問題と、この何カ月かの日本政府は領土問題で大揺れです。方や「腰抜け外交だ」、また一方では「日本は既に中国の属国だ」と、幕末の黒船来航時ですら日本国民はここまでナショナリズムに敏感ではなかったのでは？今は誰もがwebから様々な情報を得られるという環境も背景としてあるのでしょうか。しかし、最近「俄か政治評論家」があまりにも多いのにはびっくりしますね。先日も新橋で呑んでいて、近くテーブルではおじさん達グループが「やっぱり小泉再登板だな」とか「いや小沢にやらせるしかない」と現政府批判を肴に酒を飲んでいます。やっと日本国民も政治に興味を持つようになったかと思えるべきなのかも知れませんが、ついつい問題提起をしたくなる天邪鬼な性格の私としては、「小泉さん、小沢さんがどう問題解決すると思っているの？」と突っ込みを入れたいわけですね。どこか「世論が同質化」してきたと感じます。

例えば、内閣支持率調査に見られるような世論調査において支持率がこうも乱高下する自体に私は疑問を持つわけです。同じ政府に対して賛同と批判を掌を返すように繰り返す。またそれをマスコミが騒ぎ立てることで、その流れがマジョリティ化していく。この前の賛成(反対)は何が賛成(反対)だったの？と思っちゃうわけですよ。私は国民の判断基準のブレとマスコミが作り出す空気感これが異常だと感じるのです。

そのような現象が起きる理由は何故でしょうか？私が先日読んだ本にひとつの答えがあるように感じました。その本とは藻谷浩介氏の「デフレの正体」です。

本書ではデフレ経済の原因を既存のアナリスト、研究者とは違った視点で分解し、ひとつの要因にたどりつくというのですが、詳細については是非ご一読いただければと思います。ここで藻谷氏は「多くの人々がどうしてそのような間違っただ認識を信じてしまうのか？」という問題提起をしています。その理由を「空気しか読まない(KY)」からだと指摘しています。マスコミが流している情報だけで物事を判断しているからだという事です。

確かに私達は、新聞やテレビを媒介とした“編集された情報”を基に世の中を知ることが定常化しています。そして日々その情報から“推測”して物事を語っているに過ぎません。だとしたら、テレビで流れる一部の切り取られた映像、都度国民にとって心地のいい政府批判をしてくれるコメンテーターに私達は操作されているわけです。それじゃブレちゃいますよね。

藻谷氏は真実を知るには「数字をよむ(SY)」、「現場に行く(GI)」ことが大切だとしています。彼自身も銀行勤めの傍ら、地域づくり活動を推進し、訪れた市町村は合併前で3,200市町村(全体の99%)にのぼります。なので彼の地域問題に関する課題提起は非常にシャープで、研究室からしか物事を見ていない学者なんてとても太刀打ちできません。また、名のある専門家から批判を受けてもブレることはありません。なぜなら数字と実際に現場を見てきたという事実裏打ちされた見解だからです。私達も日本や政治を語るなら居酒屋で雄弁をふるう前に、もう少し「SY」、「GI」という視点を持ったほうがいいようです。

ちなみに私は居酒屋では「焼酎(S)を横(Y)に、牛モツ(G)をいただく(I)のが好きです」。

静岡県には静岡総合研究機構というシンクタンクがある。市町総合計画をはじめコンサルティング業務があり、加えて人材育成のための研修業務を行っている。親しくしている研修担当に顔を出し、話し込んでみるとふと目に「大局を読んで競争に勝つ88の視点～「戦略的発想」を磨く本」が入り込んできた。早速借りて読み始めたところ88の視点と銘打っているだけあってたくさんの「戦略的発想」を磨くエキスが詰まっている。

この中で特に特に気になったことのみを記す。

「目的を忘れて仕事に邁進する日本人の気質」と書かれた頁がある。財界のリーダーたちが国際交流のプロジェクトをめぐって、規模、場所、予算、日程などプロジェクトの実施に必要な項目が様々な角度から検討され、素晴らしいアイデアが次々と提案された。その内の一人が突然発言した。「素晴らしいアイデアや実行計画に大変感心したが、ところでこの国際プロジェクトで何を達成したいのですか？ どうなればこのプロジェクトを達成したことになるのですか？」

それまでにぎにぎしく進められていた会合がシーンとなった。と紹介されている。

そう、目的と目標の議論なしに手段を検討していたのだ。この二つを何となく意識している程度で手段いわゆる戦術を議論するとぶれるし、その良し悪しを判断できなくなる。

「何のためにやるのか」がおろそかになり、与えられたことをうまくやり遂げることが目的になっていく。これがよく手段が目的になっていると言うことだ。

小生が個人的にアドバイザーを務める下田龍馬伝のイベントにそのことを感じた。

土佐藩を脱藩した龍馬は、1863（文久3）年1月、勝海舟とともに下田港に入港したとの説がある。このとき海舟は、下田市の宝福寺で前土佐藩主の山内容堂と会い、龍馬の脱藩の許しを得たとさ

れる。この脱藩の許しにより彼は自由に動き回れる ことになった。そこで下田を「龍馬飛翔の地」として大いに情報発信して地域振興を図ろうというのがイベントの大きな目的である。

大河ドラマ「龍馬伝」は11月28日に最終回を迎えた。その日に太平洋を臨む下田の岬に高さ4mの龍馬の石像を立てた。その石像を「龍馬志の像」と今後呼び、人生の目標を立てたとき、困難に挫けそうになったとき、人生の岐路にふと会いに来たくなる石像にしたいと、魂を込めるようにと「龍馬志の像」除幕記念イベントを地元では考えた。内容は除幕式、太鼓、よさこい、地元の物産市だ。

5月の頃開いた会議では、皆の志を像に込めるために「志、絶叫大会」を提案した。目的は全国に「龍馬飛翔の地・下田」を発信することであり、目標はテレビで全国に放映されることだった。テレビ局が放映したくなる事業内容を提案し、皆もその気になって決定したはずだったが、実際は前述のとおり至極常識的な内容となった。

何を達成したいのかという目的、その達成度を計る目標を時間をかけじっくり議論して皆が共有しなければいけないことを改めて感じさせられた。

由布院温泉観光協会の事務局長を務めていた時、観光協会長の中谷健太郎さんがたびたび同じ話をされるので「その話なら何度も聞いてますよ」と言ったら、氏曰く「何度も何度も言わなくちゃ、みんなの胸の中に沁みているかのじゃよ」

こうしたリーダーの行動が「クアオルト構想」「花咲くよりも根を肥やせ」「もっとも暮らしやすい町こそ、優れた観光地」という理念を根付かせ、世代をまたいで持続可能な観光地づくりにつながっていくことになる。

